

しせきすおうのじゅせんしあと
史跡周防鑄銭司跡第8次調査 第2回現地説明会資料

山口市教育委員会
 文化財保護課

(1) 史跡周防鑄銭司跡とは

史跡周防鑄銭司跡は、山口市鑄銭司に所在する平安時代の銭貨鑄造所の跡で、昭和48年3月13日に国史跡に指定されました。史跡地においては、これまで8回の発掘調査を実施しており、平成29年度以降は山口大学と共同で調査を行なっています。(図1・2)

(2) 今回の調査について

令和2・3年度の第6・7次調査で検出した大型掘立柱建物(建物01)は、平安時代前期(9世紀頃)の銭貨鑄造工房と考えられます。その建物の規模・構造を明らかとするため、令和5年7月から第8次調査に着手しました(図2・3)。

令和5年9月に実施した第1回現地説明会の段階では、建物の東端が不明でしたが、その後の調査によって建物の東端を確認しました。これにより、建物の規模は南北30.3m、東西15.2mであることが判明しました。この規模は、これまでに確認された古代の建物跡としては県内最大となります。

建物の構造は、身舎(もや)の東に廂(ひさし)、西側に廂・孫廂(まごびさし)が付くものと考えられます。ただし、これらの廂が建物の建造当初から存在したかは検討を要します(建物増築のために付加された可能性など)。

(3) まとめ

この建物は、周防鑄銭司に設置された、炉などの鑄造施設を伴う銭貨鑄造工房と考えられます。建物のすぐ東側に位置する溝状遺構では、銭貨生産を裏付ける3種の「鑄損じ銭」が出土しており(承和昌寶・長年大寶・饒益神寶)、銭貨の鑄造時期から推定される稼働時期は9世紀中頃とみられることから、この工房もこの頃に使用された可能性があります。

今回の調査によって、日本古代の銭貨生産を支えた周防鑄銭司の生産部門の一端が明らかとなりました。

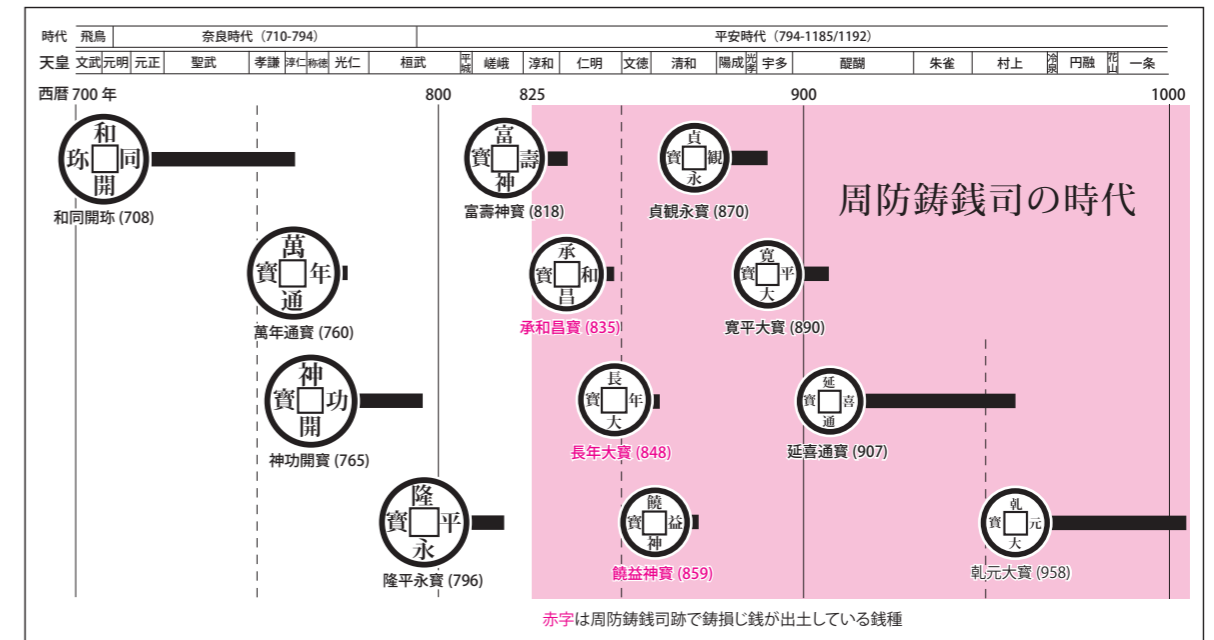


図1 日本古代銭貨の変遷と周防鑄銭司で生産した銭貨
 (山口大学作成図に加筆)

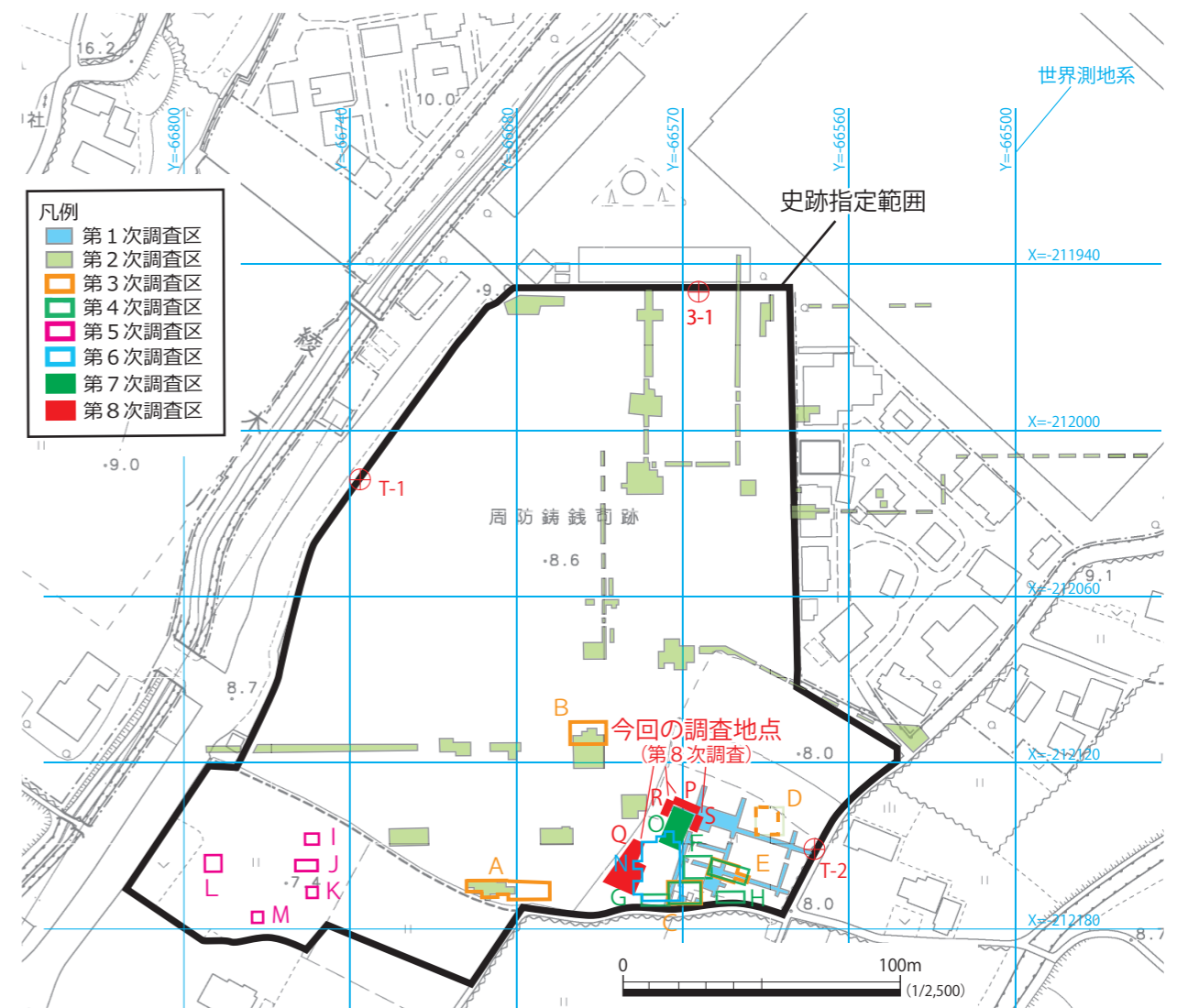


図2 史跡周防鑄銭司跡での発掘調査地点

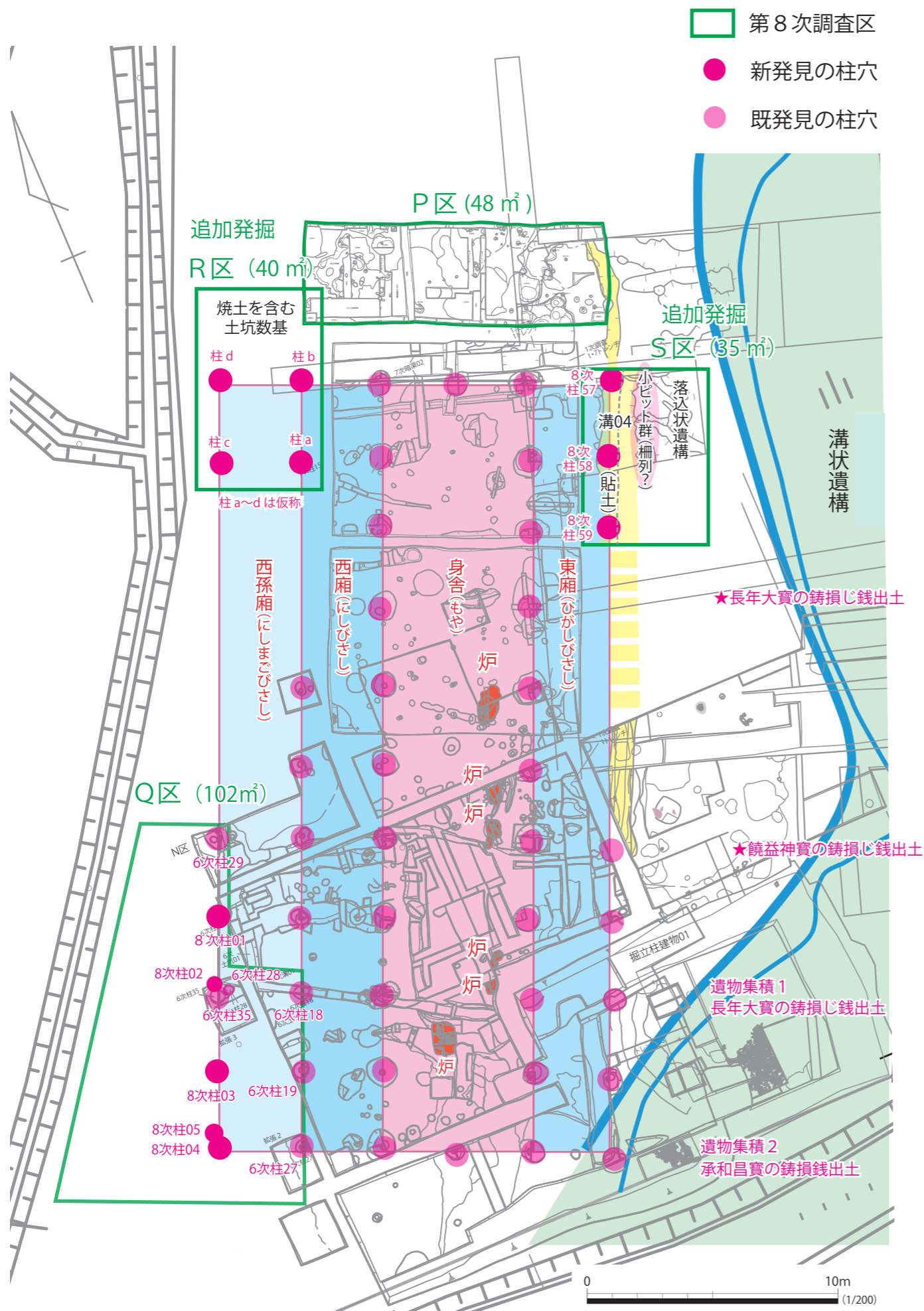
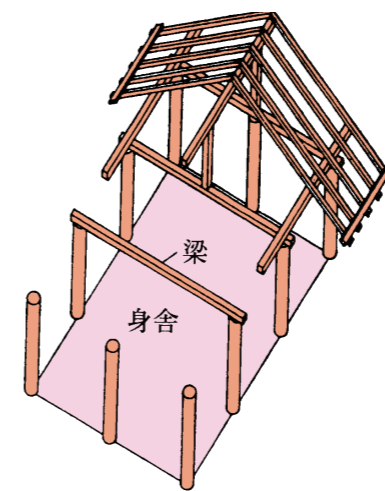
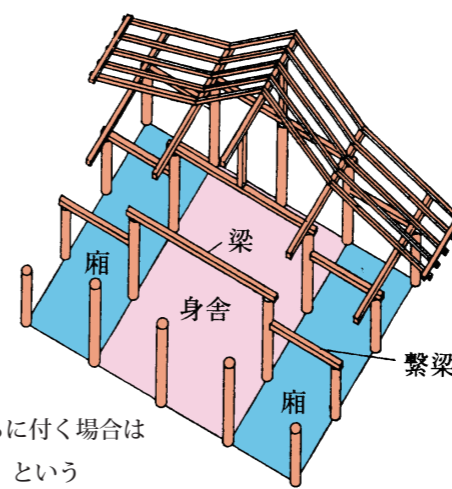


図3 史跡周防鑄銭司跡第8次調査区と周辺遺構

ひさし
①廂のない建物

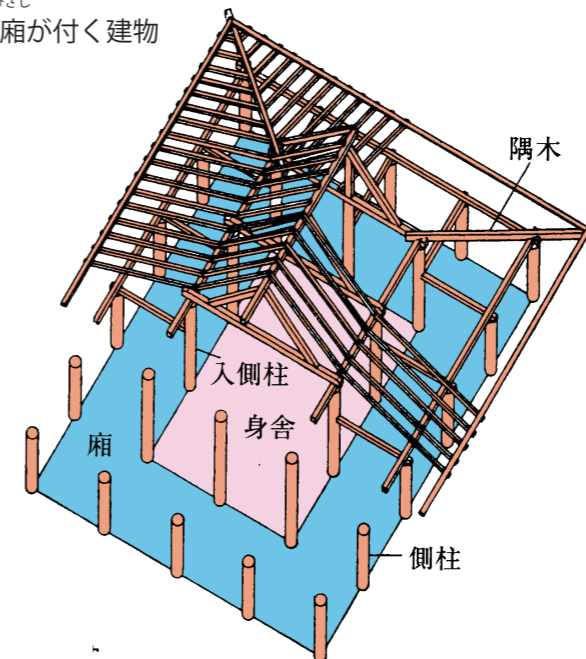


ひさし
②二面に廂が付く建物



廂に廂がさらに付く場合は
まごひさし
「孫廂」という

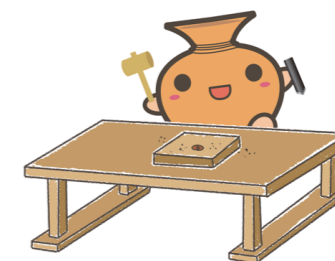
ひさし
③四面に廂が付く建物



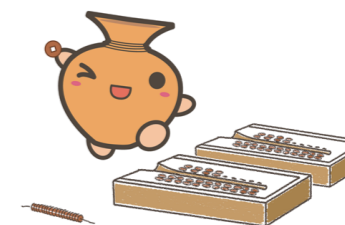
も や ひさし はり がわばしら
身舎 廂 梁 側柱

図4 身舎・廂と屋根の構造
(文化庁『発掘調査の手引き』を改変)

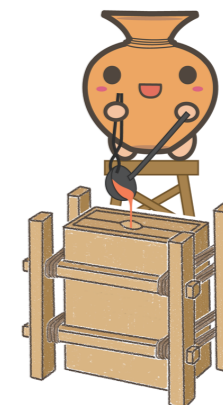
①種銭をつくる



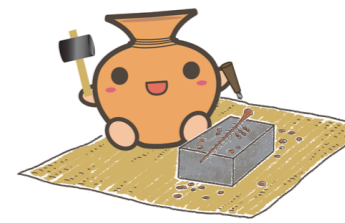
②鋳型をつくる



③溶かした銅を鋳型に流し込む



④枝銭から銭を切り離す



⑤ヤスリがけして形を整える ⑥できあがり!

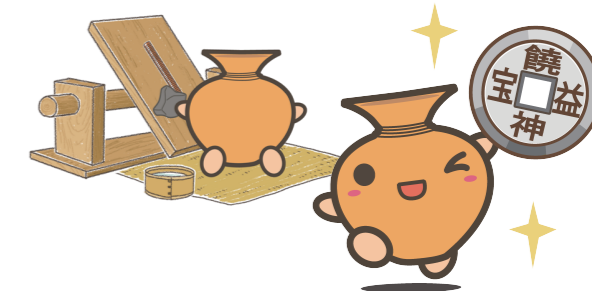


図5 古代のお金づくり (イメージ)

(奈良文化財研究所ほか編 2002『飛鳥・藤原京展』を参考に作図)